


「上毛かるた」と社会科教育

～教材としての「かるた」の意義と役割、有効性について～


久保田 福美


1 はじめに ～なぜ、今、「上毛かるた」なのか～

きっかけは、一昨年の秋、NHK大河ドラマ『八重の桜』のヒロイン「山本八重」の結婚する相手が「新島襄」であると知ったことからだった。高校時代まで群馬県前橋市で生まれ育った私の小学生時代の記憶の中で、「上毛かるた」の1枚「 平和の使徒新島襄」が、突然蘇ってきた。

群馬県人にとっては、「かるた」と言えば「いろはがるた」ではなく、『上毛かるた』だ。今も、である。

群馬県出身者ならば「誰もが読み札をそらんじて言える」と、よく言われる。

そして今、この6月に世界遺産登録が決まった「富岡製紙場」が、予想以上の見学者で大混雑となっている。「 日本で最初の富岡製糸」、この読み札も、私にとっては忘れられないものである。

『上毛かるた』が作成されたのは、昭和22年。奇しくも、戦後の新しい教育が始まり、新教科「社会科」発足の年でもあった。その『上毛かるた』の44枚の絵札や読み札は、この67年間まったく変わっていない。唯一変わった箇所は、「 力を合わせる二百万」、県民の人口増加による数字の修正だけである。「百六十万」が「二百万」に変わったのは、高度経

「上毛かるた」と社会科教育（久保田）

済成長のさ中、昭和 43 年のことだった。

44 枚の絵札と読み札に描かれている群馬県の歴史、産業、自然、人物等が、すべて今でも通用する。時代と社会を貫くその先見の明と「上毛かるた」にこめられた思いや願い、奥深さと意義・役割について、改めて、今、驚きと感動を覚える。

「毛」は、穀物を意味する。「不毛の地」は、作物ができない土地のことである。逆に、「毛のくに」とは、毛（穀物）がよく育つ地であるということである。古来よりの「毛のくに（群馬県と栃木県）」が、江戸時代に「上野（かみつけ）」「下野（しもつけ）」に分かれ、その通称「上州」「上毛」（群馬県）から生まれた「郷土かるた」を通して、日本の教育や社会科教育のかかわり・あり方について考えてみたい。

2 日本の「かるた」の歴史

(1) ヨーロッパから伝わってきた「カルタ」

「かるた」（歌留多、加留多、骨牌）は、ポルトガル語の「CARTA」に由来する。そもそも「カルタ」は、いつ、どこで、だれが始めたものか。起源は定かではないが、中国やインド、ペルシャ、エジプトなどであると言われている。

「カルタ」がヨーロッパに現れたのは、1370 年代（日本の室町時代）である。その後、大航海時代になり、スペインやポルトガルの船乗りたちが、世界に広めていった。

全ヨーロッパに広がった「カルタ」は、当時の王様や貴族たちから一般の人達にまで、広く遊ばれていた。様々な遊び方があり、1 組 60 枚や 78 枚のものは、現在のタロットゲームの始まりだった。

その後、時が経過して、ヨーロッパ各地方に、独自のマークを持ったカードが発達し、枚数も地方ごとに変化がでてきて、色々な「カルタ」が入り乱れるようになった。

アジアに「カルタ」を持ち込んだのは、大航海時代のポルトガル人である。鉄砲やキリスト教伝来の16世紀中ごろのことだ。

そのポルトガルの「カルタ」には、4枚のエースの札に竜（ドラゴン）が描いてあり、その後、日本のカルタには竜の登場するものが多い。

（2）日本の「カルタ」の起こりと移り変わり

日本で最初に作られたカルタは、九州の三池（福岡県大牟田市）で、「天正カルタ」と呼ばれている。このカルタを作るには、高い水準の工芸技術が必要であったという。

その後、天正カルタを基にして「うんすんかるた」（注1）が作られ、その中には豪華なものあり、何組かは今でも残っている。

江戸時代になると、ポルトガル系のカルタは、めくりカルタなどの遊びとして続く一方で、日本独自のカルタ文化が開花した。

平安時代から遊ばれていた「会覆（かいおおい）」「貝合せ（かいあわせ）」にヒントを得て、「いろはかるた」や「百人一首」、「道才（どうさい）かるた」（注2）が作られた。

「貝合」とは、蛤の殻上下を「出貝」「地貝」に分け、歌と絵を描き分けて、それを合わせる「歌貝覆い」「歌貝」と呼ぶ、優雅な公家社会の遊びである。

江戸時代中期には、「歌かるた」が現れ、札を競い合うゲームとして、庶民に普及した。その頃のかるた札は、蛤の形に似せたものがあったが、しだいに長方形に統一されていく。上の句に作者の像が描かれた札を読みあげ、対になる下の句の札をとる遊びとなった。

日本ほど、ヨーロッパの人々によってアジアのさまざまな地域に伝わったカルタを、固有の遊び文化と融合させて「カルタ遊び」を発達させた国はない。日本は、まさに、世界に誇る「カルタ王国」であるといえる。

その後、「いろはかるた」は、江戸時代末期から明治、大正にかけて、子どもたちに読み書きを教える「教材」の役割を果たす。「いろはかるた」

は、子どもたちの学びの旅立ちを飾り、励ます貴重な玩具だった。

注1 「うんすんかるた」は、「かるた禁止令」の中で生まれた。

「かるた」は、手軽に持ち歩けるうえに、場所もとらないので、戦国時代、戦陣の武士たちの骨休めに用いられた。しかし、やがて賭博に使われ始め熱中度が高まったため、四国土佐の長曾我部元親は禁止令を出す（1597年）。江戸時代の安定期になっても、裕福な町民から一般庶民の間まで広まっていき大衆娯楽となるにつれ、賭博性も高まっていく。

「花札」も、「花かるた」「花あわせ」と言われる「かるた」の一種である。

そのような中で、民衆の勤労意欲や生産力の低下、犯罪の増加などの問題が出てきて、幕府も、「かるた禁止令」を發布（1648年）。この禁止令により、「天正かるた」は地下に潜り（密かに賭博に使われ）、18世紀の初めに、西洋と日本文化が混じり合った豪華な「うんすんかるた」（75枚1組）に変身した。

表面上禁止された賭博系かるたに代わって、詩歌を書いた「歌かるた（後の百人一首）」（注3）や、動植物・歴史・社会知識等を書いた「絵合わせかるた」、ことわざやたとえを書いた「いろはかるた」（注4）などが生まれた。

このようにして、「かるた」は、幕府による禁止の目から逃れるため、姿形を西洋風から日本風へと趣を変えながら、名を変え、遊び方を変えて、生き続けてきた。

注2 「道才かるた」

江戸時代に「花札」が禁制となり、花札の代わりに小倉百人一首のかるたを使った博打（「むべ山」）が広まっていく。その「むべ山」の賭博性がエスカレートして誕生したのが「道才かるた」である。

ことわざが書かれた専用の札を使った「道才かるた」遊びは、元々は子どもたちのものであったが、大人用の賭博道具となる。

「これに懲りよ道才坊」という読み札が、かるたの名前の由来。

江戸時代の庶民の文化・生活の名残をとどめる貴重なかるたである。

注3 「坊主めくり」

百人一首を「かるた」として遊ぶことがむずかしい小さな子どもたちに、百人一首に触れて慣れさせ、興味をもたせるために始まった。日本最初の「天正かるた」を使った「めくりかるた」遊びもあり、これは、平安時代の「会覆い」「貝合わせ」がヒントになったものと考えられる。

「昔、坊主に強い権力・発言力があつた時代に、それをおもしろくないと思っていた公家が始めた。」という説もある。

注4 「百人一首」と「いろはかるた」の共通性と相違点

両方とも、遊びの中で暗記力やことわざの教訓を身につけるという教育的な役割がある。

まさに、日本のかるたは、遊びという形を使った古くからの教育であるといえる。

一方で、「百人一首」と「いろはかるた」の起源や歴史は異なる。

「百人一首」の方が古く、元禄（1683年～）の頃のもの現存する。

「いろはかるた」は、幕末・嘉永（1848年～）の頃、まずは関西で生まれ、後に江戸に伝わる。

内容も「上方」と「江戸」では違いがある。

例えば、「上方」は、㊦ 一寸先は闇、「尾張」は、㊦ 一を聞いて十を知る、「江戸」は、㊦ 犬も歩けば棒に当たる、いわゆる「犬棒かるた」である。

3 「郷土かるた」の歴史と現状

(1) 日本の「郷土かるた」の始まり

日本のかるたが、きわめて教育的な役割を果たしてきた経緯は、上述の通りである。それでは、「郷土かるた」がいつごろから現れたかということ、戦後になってである。その草分けとなったのが、『上毛かるた』だ。

敗戦後の世情は混乱し、家や家族を失った人たち、戦争孤児・寡婦などの境遇は、悲惨なものだった。また、GHQの指令により、学校教育での地理・歴史の授業は停止されていた。

そのような状況の中で、「何とかして、群馬の子どもたちに、愛すべき故郷の歴史・文化を伝えたい」と思いを募らせていたのが、浦野匡彦氏（後に二松学舎大学学長に就任）である。

1946年（昭和21年）、浦野氏は、満州から、故郷・群馬に引き揚げてきて、恩賜財団同法援護会県支部を取り仕切り、戦争犠牲者の支援に取り組んでいた。そのような中で、前橋で開かれた引揚者大会で、浦野氏は、安中出身のキリスト教伝道者・須田清基氏と出会う。そこで、「かるたを通して、群馬の歴史・文化を伝える」ことを提案した。

翌1947年（昭和22年）、浦野氏は、「上毛かるた」構想を上毛新聞紙上で発表し、県内各方面から題材を募った。その中から、郷土史家や文化人など18人からなる編集委員会が、44の句を選び、年内に初版12000組が発売された。翌1948年（昭和23年）には、第1回上毛かるた競技県大会が開催される。以来、その大会は今年で77回を数え、日本でいちばん歴史ある「かるた大会」となっている。

(2) 「郷土かるた」の全国の現状

戦後の社会や教育の復興の中で、現在に至るまで、全国47都道府県すべてに「郷土かるた」ができています。都道府県のレベルから各区市町村や

各地域、学校のものまで合わせると、その数は、市販されているものや主なものだけでも、535点（平成23年度：日本郷土かるた会調べ）ある。その内、圧倒的に多いのが、群馬県の107点（全体の20%）、次いで埼玉県63点（12%）、新潟県27点（5%）となる。

また、かるた大会を長年開催している上位3県は、①上毛かるた（67年間）、②さいたま郷土かるた（32年間）、③房総子どもかるた（26年間）、である。

市町村レベルの大会としては、①富士見かるた（49年間）群馬県富士見村、②佐野かるた（32年間）栃木県佐野市、③郷土いろはカルタ（32年間）神奈川県平塚市港地区、④大田市民憲章かるた（29年間）群馬県太田市・・・と、以下も群馬県の市町村が多く続いている。

このように、「上毛かるた」の群馬県は、まさに「郷土かるた」の発祥地であり、日本の「郷土かるた」の先頭に立って今も牽引しているといつてよい。

4 「上毛かるた」の社会科的意味と役割

(1) 「上毛かるた」にこめられた思いや願い

「上毛かるた」の初版発行は、昭和22年12月1日である。（編集著作・上毛かるた編集委員会、絵・小泉辰男、解説・丸山清康）読み札・絵札は、（県民人口数を除き）67年間、まったく変わっていない。そして、そこにこめられた思いや願いもまた、である。（下線：久保田）

この「上毛かるた」は日本の将来をになう小さい方が、その郷土群馬県をよく知り、そして郷土を愛するようになっていただきたいために作ったものです。

なかによまれている歴史上の人物や名所、名産等については、県下一般の人に選んでいただき、それを「上毛かるた編集委員会」で決定しま

した。 (1947年12月1日：発行のことば)

そこに描かれ、詠まれているのは、群馬県の自然であり、歴史であり、文化・人物、名産物などである。「上毛かるた」は、まさに、「郷土の歴史と地理をよみこんだ 美しい たのしいかるた」（奥付）である。

ちなみに、「上毛かるた」は、現在、「児童福祉法推薦文化財」として、改訂版（昭和43年）は、今も800円で販売されている。

繰り返しになるが、上記の「思いや願い」が、同時期に発表された戦後の新教科「社会科」の目標と重なっていることに、驚かされる。

青少年に社会生活を理解させ、その進展に力を致す態度や能力を養成することである。 (「学習指導要領社会科編」試案：1947年5月)

このように、戦争により荒廃した国土の復興と平和や繁栄に向かって立ち上がろうとする国民の思いや願いを表したものが、「上毛かるた」であり、新教科「社会科」であった。そして、それはそのまま以下の小学校社会科の目標、「よりよい社会の形成をめざす資質や能力の育成」（現在の社会科教育のねらい）に連綿と受け継がれている。

社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

(小学校学習指導要領社会科の目標：2008年)

(2) 44枚に描かれ、詠まれている「郷土の姿」

まずは郷土を知ること、好きになること。地域理解の深まりは、地域への愛着・愛情・誇りへとつながっていく。

「上毛かるた」では、名所、歴史上の人物、地理、歴史、産業、自然など、平面軸と時間軸での理解を深めることを通して、子どもたちに郷土群

馬への愛着・愛情・誇りを育んでいくことをねらっている。「かるた」でありながら、それは、きわめて社会的な教材であるといえる。以下、観点別に整理してみた。

①名所など

あ 浅間のいたずら鬼の押し出し い 伊香保温泉日本の名湯 う 碓氷峠の関所跡
え 縁起だるまの少林山 お 大田金山子育吞龍 く 草津よいとこ葉の出湯
せ 仙境尾瀬沼花の原 た 滝は吹き割り片品渓谷 に 日本で最初の富岡製糸
は 花山公園つつじの名所 ひ 白衣観音慈悲の御手 ふ 分福茶釜の茂林寺
み 水上谷川スキーと登山 や 耶馬溪しのぐ吾妻峡 よ 世のちり洗う四万温泉
る ループで名高い清水トンネル

②代表的な人物

こ 心の灯台内村鑑三 て 天下の義人茂左衛門 め 沼田城下の塩原太助
へ 平和の使徒新島襄 ほ 誇る文豪田山花袋 れ 歴史に名高い新田義貞
ろ 老農船津伝次平 わ 和算の大家関孝和

③地理・歴史・自然・産業

か 関東と信越つながり高崎市 き 桐生は日本の機どころ け 県都前橋生糸の市
さ 三波石と共に名高い冬桜 し のぶ毛の国二子塚 す 裾野は長し赤城山
つ つる舞う形の群馬県 な 中山道しのぶ安中杉並木 と 利根は坂東一の川
ね ねぎとこんにゃく下仁田名産 の 登る榛名のキャンプ村 ま 繭と生糸は日本一
む 昔を語る多胡の古碑 め 銘仙織出す伊勢崎市 も 紅葉に映える妙義山
り 理想の電化に電源群馬

④その他

そ そろいの仕度で八木節音頭 ち 力合わせる二百万 ら 雷と空風義理人情

(3) こめられた「郷土愛」

「上毛かるた」制作の中心を担った浦野匡彦氏の長女：西方恭子氏の一文が、13年前の日本経済新聞（2001年1月8日）に掲載された。タイトルは「郷土愛カルタに刷り込む～“上毛かるた”に込めた父の復興への思い受け継ぐ」というものである。

その中で、西方氏は、当時の忘れられない光景を、次のように述べている。「地元の教育関係者や郷土題材はたびたび連合国軍総司令部（GHQ）

の検閲を受けた。白いヘルメット姿の憲兵が我が家に乗り込んで来たこともある。ようやく完成した日、カルタを一箱だけ持ち帰った父は家族全員を集めて一枚一枚読み上げた。声が涙に震えていた。」

さらに、「こうしてできた札には、父の群馬県のみならず日本国の復興、品格ある道義国としての日本の再興の願いが込められている。」と西方氏は述べ、「特に父が作った4枚の札に潜む思い」について以下のように綴っている。（以下は、久保田の要約）

㊦ つる舞う形の群馬県 これは古くからの表現だったが、実は戦時中は、戦意を鼓舞するために「タカ」「ワシ」という強い鳥に変わっていた。それを「めでたい鶴の背に乗っている君達は天山越えて飛ぶ鶴のように堂々とはばたけ」と子供達に呼びかけたのだという。そして、もう一つの願いは、当時、シベリアに抑留されていた同胞が、飛び立つ鶴に心を託し、故国日本に帰還できる日まで頑張り、一歩でも二歩でも南下してほしいというものである。

㊧ 力あわせる百六十万 これは、群馬県民だけでなく全国民に呼びかけたものである。

㊨ 誇る文豪 田山花袋 この札を加えた理由は田山花袋「東京の三十年」という著作に共鳴していたからである。そこには、明治期の国民が老若男女を問わず靖国神社に親しみ、参拝する情景が描かれている。神官の子として生まれた浦野氏は、靖国神社は本来、軍人のための神社ではなく、男女、子供を問わず、幕末以降の日本近代化に尽くした人々をまつた神社であり、他の神社と性格を異にしているという。だから戦後は、日本人が祖先を振り返り敬う場として靖国神社を再興すべきと考えた。

㊩ 雷と空っ風 義理人情 気候や県民性を表した札であるが、隠れたエピソードがある。実は小栗上野介を札に登場させたいと考えていた。小栗は日本の近代化に尽力した人物である。その優れた先見性ゆえに疎まれ、最後は知行地であった群馬で斬首の憂き目にあった。後に海軍の基礎を築いたとして名誉回復された。しかし、海軍の功労者という理由でGHQか

ら「上毛かるた」の中に名前を入れることが禁じられた。そこで、小栗の精神を「義理人情」という言葉に託したのだという。

西方氏は1998年に英語版「上毛かるた」を発行した時、父の思いをこめて「群馬県人の気質あふれる正義感と人間愛」(※)と訳した。

※ a deep sense of civic duty and humanity characterize Gunma

1986年に浦野氏が亡くなる。長女の西方氏は、「新しい世紀を迎えて、父の思いを明かしてもよいのではないか」「父の思いをこめた4つの札は、国造りの4本柱である」と考え、2001年1月8日の新聞掲載を決めた。

(4)「社会科授業のコツかるた」づくり

この7月、社会科概説の授業の最後に、まとめの作品作りの例の一つとして「かるた」を取り上げた。(文学部部教育学科2年生48名)その際、「日本最古の郷土かるた」(ということは「世界最古の郷土かるた」)として「上毛かるた」を紹介した。

そして4か月間の授業のまとめとして、学生全員でつくりあげたのが、以下の「社会科授業のコツかるた」である。44文字はくじ引きで分担し、読み札等を作成した。

下記の読み札を見てわかるように、社会科授業づくりのポイントや大切な視点などが、さまざまな角度から的確に述べられている。「かるたづくり」が、大学の授業においても、考えたりまとめたりしていくうえで、有効であることがわかる。

- | | |
|---------------------------|------------------------|
| ㊦ あしをはこんで 本物を見る | ㊩ 意見交換 深め合い |
| ㊧ うきうきさせる導入で 興味をもたせよう | ㊪ 「えっ!?!」ではじまり 「あー」と納得 |
| ㊨ オリジナルな 授業展開が ものを言う | ㊫ 考える これぞ社会科の楽しみ方 |
| ㊬ きっかけは 身近なところに ひそんでいるよ | ㊭ クイズから 何を読み取る 十人十色 |
| ㊭ 今朝見たものも 社会の資料!? | ㊮ 子どもが楽しみ 大人も楽しむ |
| ㊮ さりげない ふくせん 問いかけ 大事なポイント | |
| ㊯ しかく的に 興味関心 ひきつける | ㊰ するどい視点で 社会(世の中)を観察 |
| ㊱ 世界地図 世界のはてな?が見えてくる | ㊱ そうなんだ!! 新たな発見 知識人 |

「上毛かるた」と社会科教育（久保田）

- | | |
|---------------------------|-----------------------|
| ㊦ たちどまり 既知のことから 未知の発見 | ㊧ ちいきに とびこみ だいはっけん！ |
| ㊨ つかみとれ 生徒のハートと いいネタを | ㊩ 手と足 うごかし ちしきえる |
| ㊬ 問いかけて 興味をわかせる 授業がはずむ | ㊪ なにもかもが 社会科ネタになる |
| ㊮ にちじょうの風景 気づけば 立派な 社会科ネタ | |
| ㊰ ぬくぬくと 広げる 深める たんきゅう心 | ㊫ 年表づくりは 愛情もって |
| ㊲ ノートから 広がる 深まる 社会の輪 | ㊬ はじめ（導入）は はてな？から |
| ㊴ ひはん せいろん いいいけん | ㊭ ふしぎが 大切だよ 授業の導入 |
| ㊶ へんだなあ 疑問が大切 そこから追究！ | ㊮ ほめて 子どものやる気を 高めよう |
| ㊸ 学び合い グループ活動 考え合おう | ㊯ 見て 聴いて さわって 考え 伝えよう |
| ㊺ むかしから 今のことまで 学び合い | ㊰ 目の前の 小さなものから 大発見 |
| ㊼ ものなどの 道具を使い おもしろく | ㊱ やきまんじゅう ぐんまの魅力の 第一歩 |
| ㊾ 夢を語ろう この社会 | ㊲ よく見て よく聞いて よく考えよう |
| ㊿ らぶ社会♥ 社会を愛する心が大切♥ | ㊳ 理由は何？ 考えたら 理解 深まるよ |
| ㊦ ルーベのように よく見てみよう 身のまわり | |
| ㊨ れんけいして ひとつの授業を つくりあげよう | |
| ㊬ ロマンたっぷり 歴史の探検 | ㊪ わくわく わかせる 分からせる |

(5) 小学校3年生社会科のまとめとしての「かるたづくり」

3年生は、社会科のスタート入門期の学年である。1学期の「学校のまわりのようす」や「区市のようす」、2学期の「はたらく人（お店、農家、工場）」、3学期の「むかしの様子とうつりかわり」の学習を通して、地域の生活について平面軸での理解と、身近な生活の歴史について時間軸での理解を深めていく。その1年間の社会科学習のまとめとして「かるたづくり」をすることにより、楽しみながら、さらに地域の様子について理解を深め、愛着を育てていくことができる。

以下は、校内研究会で私が2年間指導助言者としてかかわった墨田区立横川小学校3年生（2014年3月）による「かるたづくり」の一例である。

あえて「44枚」の文字をすべてそろえず（実際は32文字が使われ、今回12文字の読み札はなかった）、文字や内容の重複を認めたとあえての「かるたづくり」としたのは、児童の実態や3年生という学年の発達段階を考えたからである。もちろん「44枚すべて作成」をめざしてもよいことは

はいうまでもない。

今回の授業では、「昔から今へのうつりかわり」の学習の中心に「洗濯板体験」をはじめとして「昔の生活の道具や遊び」を取り扱ったので、下記のかかるたづくりの内容も昔の遊びや生活用具・道具等が大変多いことがわかる。昔の生活への愛着をもち、身近に具体的にとらえていくだけでなく、「町に残る昔」や人々の工夫や思いに迫ることで、さらに内容の広がりや理解を深めていくことは、今後の課題でもある。

また、1年間の社会科学習のまとめとしての「かるたづくり」ということでは、下記の読み札のように3学期の昔单元だけに偏ってしまう。そこで、1学期の「学校のまわりや区のように」や、2学期の「区市の人々のしごとのように（お店、工場、農家）」の学習の終末ごとに「かるたづくり」でまとめていき、蓄積していくことで、地域社会を全体的に捉え返していくと共に、内容的な広がりや深まりをもった充実した「わたしたちの〇〇かるた」をつくりあげていくことができる。

- ㊦ あんなにも昔はたいいへんだったせんたくいた アルマイト弁当ばこを使ってた
アイロンの下のぶぶんは あっちち
- ㊧ いろんな番組うつしたよ 白黒テレビからカラーへと 石けりで すべてクリア うれしいな
いもをね ストープでやいたんだ いどから水をはこんで せんたくだ
- ㊨ うれしいな けん玉うまくできたとき ㊩ えがおになる ふくわらい
- ㊪ お手玉は きょくげいできる遊びだよ お手玉 毎日 楽しいな
お手玉をぼんぼんかけて たのしいな
- ㊫ かまに湯気がでる ご飯たき かまどでは あつあつごはんがたけてるよ
か〜ごめかごめであそんだよ ルンルンたのしいわらべうた
かんけりで 楽しくあそんだ みんなでね カルタはね ポルトガルからやってきた
- ㊬ きものをね いつもみんながきていたよ
- ㊭ 黒でんわ いつもみんながつかってた 車はね 昔は人力 たいへんだ
- ㊮ けん玉は むずかしいわざでいっぱいだ けん玉で あなに入って うれしいな
- ㊯ コマまわし うまく回せて うれしいな ㊰ さむいとき ひばちで手をあたためる
- ㊱ しょうぎは あたまをつかうあそびだよ ㊲ すみ田区のれきしにのこる横川小
すみでおうちをあたたく ストーブは 時代が変わり 進化する
すみでアイロン使ってた すみで もちやく いもをやく

「上毛かるた」と社会科教育（久保田）

- ㊤ せんたくき いろんな時代でかわってる せんたくき どんどんしんかをしていくよ
- ㊦ たらいにね 水を入れたらせんたくだ たまごやき 昔は高級食材だ
たくあんは むかしからある つけものだ たけざおで せんたくほしをやってた
竹とんぼ 昔あそびは楽しいね ㊧ ちゃんばらは 昔の子どもの人気のあそび
ちゃんばらごっこ マントをつけて たいけつだ ちいきにも せんそうがあったんだ
- ㊨ つっぱりだ!! がんばれがんばれ すもうごっこ ㊩ 鉄のこま ひびく音を聞いてみたい
手まりをね ついてあそんだ友だちと テレビはね 時代が変わり 進化する
- ㊫ なんだろう!?! あっ わかったぞ!! お米だね 夏は 子どもは外で虫取りだ
- ㊬ にんじんに大根玉ねぎ玉子さん たくさん入るね れいぞうこ
にっぽんが やっとへいわにもどったよ にそう式 ガタガタうるさいせんたくき
にいさんと ベーゴマたいけつ 勝てるかな ㊭ このこといりりはだれでもあがれるよ
- ㊮ はごいたはパチンとなるよ いい音だ はごいたで、昔の子どもはあそんでた
春は花見だ すみ田川 はこぜんの 中に食器をしまえるよ
- ㊯ ひばちは 昔のストーブだ ひしゃくは 水をすくうもの
- ㊰ ふくわらい できあがったかおがおかしいよ ぶんぶんゴマ 音をたててまわってる
フラフープ みんなで回して たのしそう
- ㊱ ベーゴマあそびは 楽しいな ベーゴマ めんこ 昔あそびもおもしろい
- ㊲ ほうきでね おうちがきれいに いい気持ち ㊳ みずあめは 昔の子どもの好物だ
水をくむ 一回一回 ひとつくろう みつけた かくれんぼって楽しいね
- ㊴ むかしはね ねまきでねてる 寒そうだ むかしはね せんたくきがうるさいよ
むかしのボンせんたくき うるさいね ㊵ めんこで勝負だ ワイワイと
めんこあそびは たのしいな 明治時代 初めてできた小学校
- ㊶ やきゅうする 三角ベースは楽しいな ㊷ ゆをわかそう 水は全部ここからだ
- ㊸ リリアンは ほしがたにあんでいくんだよ リリアンは昔の子どものあそびだよ

5 むすびに ～「上毛かるた」は社会科の原点なり～

私が、今も、山々を見ると落ち着いた気持ちになるのは、いつも、赤城、榛名、妙義の、「上毛三山」に見守られて育ってきたからかもしれない。昨年、私は、群馬県へ紅葉狩りに行ってきたとき、「群馬の、かきくけこ」を作成した。

- ㊸ かかあ天下とからっ風 ㊹ 義理人情 生糸に養蚕 織物のまち

- 雲は流れる 上毛三山 煙ゆらめく 出湯の里
 こんにゃくとねぎは下仁田名産

ちなみに、『上毛かるた』の「かきくけこ」は、以下の通りである。

- 関東と信越つなぐ高崎市 桐生は日本の機どころ
 草津よいとこ 葉の出湯 県都前橋 生糸の市
 心の灯台 内村鑑三

今も、懐かしさと愛着と誇りをもって、いろいろな言い方で郷土について語れることを、何よりも嬉しく思う。

結びに、「上毛かるた」の中で、私がとりわけ大好きな札として紹介したいのは、「 鶴舞う形の群馬県」である。既述の通り、制作者：浦野氏のとりわけ思いの込められた札である。これほどまでに、すっきりと言いつ切っている表現は、なかなか見当たらない。「 ねぎとこんにゃく下仁田名産」と並んで、一度聞いたら忘れられない読み札である。

私にとっては、知らず子どもの頃から「上毛かるた」を通して、生きた社会科を学んできたことを、今、改めて強く感じている。「上毛かるた」は、私の社会科の原点であり、「かるた」が社会科教育において大事な役割を果たす教材であることを、60年余の時間の経過を通して教えてくれた。それは、私に郷土に対する誇りと、生きる力と、これからも社会科教育に携わっていく勇気を与え続けるものでもある。

【参考文献】

- 「上毛かるた」（上毛かるた編集委員会、群馬文化協会 1968 年）
「特集：日本一の上毛かるた」（山口幸男・原口美貴子、あさを社 1998 年）
「上毛かるた、その日本一の秘密」（原口美貴子、上毛新聞社 1996 年）
「全国の郷土かるたー郷土かるた王国群馬からの発信」
（日本郷土かるた研究会、群馬大学図書館 2003 年）
「新版社会科教育事典」（日本社会科教育学会、ぎょうせい 2012 年）
「郷土愛カルタに刷り込む～“上毛かるた”に込めた父の復興への思い受け継ぐ」
（西方恭子、日本経済新聞 2001 年）